日本語における反応機会場と第二言語会話への転移

細　田　由　利

0. はじめに

近年社会言語学において「会話における文法」ということが注目されるようになってきた。これは40年ほど前に言語人類学の分野において言葉の民族誌（ethnography of communication）（Hymes, 1962）が紹介され、それによって実際の相互行為を録音したものをデータとして分析するという研究法が高く評価されるようになったことが一つのきっかけと言える。それ以降、言語人類学者達は、社会的秩序や文化理解というものは会話参与者が相互行為の中でその時々に表現していくものであるということを発見し、それぞれの表現の中で話者の文法的能力というものがどのように駆使されているのかということを解明していった。一方、言葉の民族誌が紹介されるのとほぼ同時期に社会学の分野では、ハーヴィー・サックス、エマニュエル・シェグロフ等（e. g., Sacks, 1967, 1972; Schegloff, 1968）によって会話分析という研究法が台頭してきた。会話分析者は「自然に生起する相互行為」を録音し、それを繰り返し観察および文字化をしながら相互行為の組織を明らかにし、その組織の確立のために会話参与者が行う様々な相互行為上の手段を明らかにしていった。

これらの言語人類学および社会学における研究は言葉や相互行為を取り扱う幅広い分野の研究者達に、従来言語学の分野で広く正しい「文法」と捉えられて研究されてきたことは、相互行為の組織と秩序という観点から検討され直す必要性があるのではないか、という共通認識を持たせた。現在までに、多くの研究により相互行為と文法は切り離して考えることはできないものである、つまり、相互行為と文法は互いを組織し文法は相互行為の手段である（Ochs, Schegloff, & Thompson, 1996）ということが立証されてきた。それらの研究の中で数多くの研究者たちが問題としたのは、「文」と「文法」というものを相互行為の中でどのように把握すべきかである。例えば、相互行為においては、話し手は必ずしも一回の発言順番内で一つの文を最初から終わりまで発話するわけでない。一人の話し手によって始められた「文」として文法的に認識可能な単位が複数の発言順番にまたがって発話されることがあるということは様々な文脈において頻繁に観察されており、このことはこれまでに英語の会話においても（Lerner, 1991, 1996, 2004）日本語の会話においても明らかにされている（Hayashi（林），2003, 2004, 2005; Lerner & Tagagi, 1999; 森、in press; 西阪、2005a, 2005b, in press）。しかしながらごく最近になって、一つの文が発話中のどの時点で分断されるのかということについては日本語会話と英語会話の間では多少の違いがあるのではないかというという指摘がされた（西阪、in press）。

本稿では、会話分析の手法を用いて西阪（in press）の述べた日本語会話における文の分散を再考し、更に第二言語会話における文の分散についても検証していきたい。

1. 発言順番を構成する単位（TCU）と反応機会場

1970年台に発表されたハーヴィー・サックス、エマニュエル・シェグロフ、及びゲール・ジェファーソンによる英語の日常会話における発言順番組織についての論文（Sacks, Schegloff, & Jefferson, 1974）は社会学および言語学の分野に大きな波紋をよんだ。著者達はそれまでほぼ無秩序であって研究に値しないと考えられていた日常会話にはある一定の秩序があるということを示したからである。この1974年に発表された論文では日常会話における発言順番交代の一種の規範が示されている。原則として一回の発言順番に一人が話し、発話の重なりや沈黙は最小限に留められ、この「一回に一人」という暗黙の規範は会話参与者達自身によって会話の中で志向されている。また、基本的に一回に一つの「発言順番を構成する単位」（Turn Constructional Unit, TCU）を発話する。発言順番を構成する単位は必ずしも「順番」と一致するとは限らない。ここで言う順番とはいわゆる後付けのものであり、結果として順番交代がなされた場合にその時の発話を順番と呼ぶ。それに対し、発言順番を構成する単位とは順番交代が可能な区切りのことである。あくまでも順番交代が可能な単位であるから当然そこで順番が変わらないこともある。つまり一人の人が一回の発言順番に二つ以上の発言順番を構成する単位を発話することもあり得るわけである。しかしながら、サックス等によれば、聞き手は（多くの場合ほぼ無意識に）その単位の区切りに注目して話し手の発言を聞き、区切りがくると沈黙をはさんだり発言を重ねたりせずにほぼ正確なタイミングで次の発言順番をとる。このように聞き手は現在の話し手の発話を綿密に分析してその発話の区切りがどこにくるのか、自分が順番をとることが出来る機会はいつ来るのか、

と監視しているため、最初の区切りで現在の話者以外の（今まで聞き手であった）話者が順番をとることが当然多くなり、結果的に一つの発言順番に一つの発言順番を構成する単位ということになるのである。英語会話の場合、発言順番を構成する単位は、単語、節、句、又は文といったもので構成されている。つまり、私たちが会話の中で一回の順番に話すことは、文になっているとは限らないのである。たとえば次の例（1）では、一つの発言順番を構成する単位が一つの単語から成り立っている。

(1)［Sacks, Schegloff, & Jefferson, 1974, p. 702］

Desk：　What is your last name［Loraine.

Caller：→　［Dinnis.

Desk：→　What?

Caller：→　Dinnis.

次の例（2）は節の発音順番を構成する単位の例である。

(2)［Sacks, Schegloff, & Jefferson, 1974, p. 702］

A：　Oh I have the— I have one class in the evening.

B：→　On Mondays?

A：　Y-uh:::Wednesdays. =

B：　=Uh-Wednesday, =

A：　=En it's like a Mickey Mouse course.

例（3）は句の発言順番を構成する単位の例である。

(3)［Sacks, Schegloff, & Jefferson, 1974, p. 703］

A：　Uh you been down here before［havenche.
B：　［Yeh.
A：→　Where the sidewalk is?
B：　Yeah,
A：→　Whur it ends,
B：　Goes［all a'way up there?
A：　［They c'm up tuh the: re,
A：　Yeah.

また、文で構成されている発言順番を構成する単位は上のすべての例の中で見られる。

つまり、一つの単語、一つの節、一つの句、一つの文すべてが潜在的完結点（possible completion point）となり得るわけである。（前述のように、話し手は潜在的完結点をすぎても話し続けることがあり、その話し手が話し続ける限りそれはまだその人の話す順番だということだ。よって潜在的完結点はかならずしも完全な完結点とは限らない。）それではなぜ次の話し手は現在の話し手の順番が終わったということを予測できるのだろうか。これは人が今の話し手がどこで順番を終えるかを予測する能力を持っているからである。この能力は「投射可能性（projectability）」と呼ばれている。この「投射可能性」を促進する重要な要素の一つは会話参与者の持つ文法能力である。例えば英語で話し手が「If＋X」と言えば、次に「(then)〜」の要素が続いてくるというように予測できる（Lerner, 1991）。もう一つの要素はイントネーションである。話し手は文法だけでなくイントネーションによっても、これからまだ話が続くのかそれとももう終わりなのかということを示す。よって聞き手は現在の話し手の話の文法とイントネーションから現在の話し手

の発言の完結点を予測して話を始める。その予測はまだ現在の話し手が話している間に行う。実際に話し終わるのを待っていたら順番と順番の間にいくぶんかの沈黙ができてしまうはずだ。基本的には一回の順番で話し手が話す権利があるのは一つの発言順番を構成する単位であり、話し手が一つの発言順番を構成する単位が潜在的完結点に至ると、次の話し手への移行が可能になる。

これまでの会話分析研究により、一回に一人が話す、という規範は言語普遍的な事実であることが分かってきた。日本語会話も例外ではない。日本語会話においても発話の重なりや沈黙は最小限に留めようとする会話参与者の志向が見られる。それでは、発言順番を構成する単位と発言順番交代の関係についてはどうであろうか。順番を構成する単位が文だけでなく、単語や句で構成されることがあるのは英語会話の場合と同様である。また、英語会話においても日本語会話においても一つの文と認識できる単位が二人以上の発話者によって完成されることがあることがある[1)]。しかしながら、日本語会話と英語会話では聞き手の反応が観察される位置という点で多少の違いがあるのかもしれない。日本語会話においては、一回の発言順番における発話が英語会話に比べて短く、一つの単語の形態素や助詞のみになる場合もあることが報告されている（Iwasaki, 1993 ; Maynard, 1989）。また、西阪（in press）は会話分析の視点から、日本語会話における（発言）順番構成的にも表現的にも未完成な場所でありながら聞き手の反応が規則的に観察できる場所を観察した。表現的な完結点とは、もうここで自分の話が終わりであるということをしめす表現と音調が使われている場、つまりさらに続きがあることを主張する表現（て、で、などの助詞）や音調が使われていない場所である。これに対して順番構成的な完結点とは、一つのアクティビティが完結していて（質問として成り立っている、答えとしてなりたってい

る、など）他の話者に順番が移行することが適切な場所である。順番構成的な完結点というものと表現的な完結点というものは必ずしも一致しない。西阪は順番構成的にも表現的にも未完結な場でありながら聞き手に反応の機会が与えられている場所を「反応機会場」と呼んでいる。その特徴は、（ⅰ）単語の語尾にあり（単語の途中にない）、（ⅱ）語尾が伸ばされることがあり、（ⅲ）「区切り」を表わす標識（「さ」「ね」など）を語尾に伴うことがあり、（ⅳ）最後の音が強く発話されることで音調が少し上がったり、またその直後に少しだけ下がったりすることがあり、（ⅴ）語尾の伸ばされた音の最後が強く発話されることにより音調が少し上がることがあるが順番を構成する発話の語尾ほどは上がらない、であるとしている。そして西阪によれば反応機会場の後には聞き手のなんらかの反応が期待されるが、その期待度は質問に対して答えが期待されるような強いものではない（つまり反応がない場合も多々ある）、とのことである。更に西阪は、反応機会場における聞き手による反応はその聞き手が話し手の話を聞いており、参加の用意があることを主張している、と記している。「反応機会場」のような場所での聞き手の反応は英語会話においては報告されておらず、おそらく日本語会話と英語会話の体系的な違いの一つではないかと考えられる。

本研究では、日本語会話における「反応機会場」の特徴を再確認した上で、日本語第一言語話者による英語での会話を、聞き手が話し手の話しに反応を示す位置ということに注目して会話分析の視点から微視的に検証していく。

2. データ

本研究に使用されたデータは録音録画された３組の二人会話、合計約

60 分であり、会話参与者は全員日本語第一言語話者である。3 組のうちの 2 組は日本語での会話（データ 1、データ 2）で残りの 1 組の会話は英語での会話（データ 3）である。すべての会話参与者は某米国大学日本校で英語教授法を専攻する修士課程の学生であり、英語能力は TOEFL575 点以上の英語上級話者である。それぞれの組の会話参与者達はクラスメート同士であるが、特に親しい友人同士ではない。すべての会話参与者は録音録画がなされる前の週に Applied Linguistics（応用言語学）という必修のクラスの中で Bley-Vroman（1986）の第一言語習得と第二言語習得の違い 10 点に関する文献（英語）を読んでくるようにとの課題が出され、データ中の会話においてはその文献について話している。内容は主に第二言語習得の成功の是非、第一言語習得と第二言語習得の相違点、更に一般技術の習得と第二言語習得の相違点である。すべての会話は会話分析研究における標準の表記法（Jefferson, 1984）を用いて詳細に渡って文字化され、分析は文字化されたデータと元となる録音録画データを繰り返し検証することによって行われた。

3. 日本語会話における反応機会場（データ 1、データ 2）

上に述べたように、西阪（in press）によれば、日本語会話において発話者は表現的にも発言順番構成的にも完結していないところでしばしば反応機会場を設けて聞き手に反応をする機会を提供する。西阪は「ていうかさ : : 、」、「あのさ : : : : : : 」、「あの事務所に : 」などのように明らかに表現的にも順番的にも完結点でない場所の直後に聞き手は「はい」「うん」などの反応を示す例を示している。

今回のデータの中にもそのような例が多く見られた。下記の例では、ゆめ子が第一言語話者の間でもコミュニケーション能力には差があると

いうことについて話している。ゆめ子が 01 行目から 14 行目で一つの文として認識可能な単位を発話し終えるまでに頻繁に反応機会場を設けているのが観察される。

(4)［データ 1：8：154–168］

01　ゆめ子：　ある程度の：
02　ひとみ：　うん.
03　ゆめ子：　あの：：ちゃんとした企業ではたらいて：＝
04　ひとみ：　＝うん．＝
05　ゆめ子：　とかそういう風に思えばね、＝
06　ひとみ：　＝うん．＝
07　ゆめ子：　あの：ちゃんとコミュニケーションにしたって：＝
08　ひとみ：　＝うん．＝
09　ゆめ子：　＝仕方にしたってきれいな言葉で＝
10　ひとみ：　＝うん．＝
11　ゆめ子：　＝話せるようになろうに―なろうとか
12　　.hh きれいな発音［では］なせるようになるとか：
13　ひとみ：　　［うん］
14　ひとみ：　うんうん.
15　ゆめ子：　そういうのはあると思うんですよね.
16　ひとみ：　うんうんうん．読解力なんかは…

上記の例でゆめ子は 01 行目、03 行目、05 行目、07 行目、09 行目、12 行目の終わりに反応機会場と思われるものを設け、その直後にひとみの「うん（うん）」という反応が見られる。これらの場所では西阪の述べた反応機会場の特徴が観察される。これらの場所は単語の語尾にあり、語

尾が伸ばされており、「区切り」を表わす標識を語尾に伴っており(「て」、「ね」、「とか」など)、最後の音が強く発話されることで音調が少し上がったりその直後に少しだけ下がったりしている。そして重要なことはこれらの場所は明らかに表現的にも発言順番的にも完結点ではないということである。例えば 01 行目の「ある程度の:」に注目してもらいたい。表現的には「〜の」と来た場合にはその後にはなんらかの名詞又は名詞句が来ることが予測され、「〜の」の時点ではまだ未完結であると考えられる。また、順番構成的には前述のように一つの単語で発言順番が構成されることはよくあることであるが、この時点は話の始まる時点であり、「ある程度の:」によって何らかの活動が完結している時点ではない。上に単語で構成される発言順番構成単位の例として挙げた例（1）と比較して欲しい。例（1）では質問の答えとして「Dinnis」という単語を発話することによって十分に活動が完結しており、この後に発言順番が交替することは納得のいくことだろう。それに対して「ある程度の:」という発話がしていることは、この話者によるなんらかの報告や意見の始まりを示すことであり、発言順番の交替は予測できない。同様に他の 05 行目、07 行目、09 行目、12 行目の終わりも表現的に区切りは表わすが未完結であり（「て」、「で」、「ね」、「とか」が語尾に伴われている)、また活動も未完結な点であり発言順番の交替が予測できない点である。しかしながら聞き手（ひとみ）はこれらの場所の直後に「うん（うん)」と言ってそれに反応している。ここで 11 行目から 14 行目に注目したい。11 行目にゆめ子は「話せるようになろうに―　なろうとか」と発話して反応機会場ととれるものを設けているが、その直後にひとみの反応は見られない。これは西阪が述べたように、反応機会場は聞き手の反応が期待される場所ではあるが質問に対する答えのように反応しなければならない場所ではないということに起因しているかもし

れない。しかしながら、ひとみは多少遅れた場所で「うん .」と反応し(13 行目)、さらに興味深いことに次の反応機会場では「うん」を二回続けて「うんうん .」と反応している。これはその前の反応機会場（11 行目の終わり）で適切な反応がなかったことと無関係ではないように思える。前の反応機会場で適切なタイミングで反応を出来なかったひとみはその後の反応機会場で前の分を補うように「うんうん .」と反応しているのではないだろうか[2)]。

次にこの反応機会場における聞き手の反応の有無が会話参与者自身によっていかにして志向されているかということについて更に詳しく検証してみたい。下記の例（5）ではゆめ子とひとみが一般技術の習得と第二言語の習得の相違点について話している。

(5)［データ 1：19：401-411］

01　ゆめ子：　私ねピアノとか楽器類は:
02　ひとみ：　楽器類
03　ゆめ子：　ほら子供の時から[習わないとだめじゃないですか.
04　ひとみ：　　[うんうんうんうんうんうんうんうん
05　　うん .
06　ゆめ子：　あれ[はすごく近いと思うんですよ] ね．バイオリンと
07　　か:
08　ひとみ：　　[うんうんうんうんうんうんうん]
09　　(.)
10　ゆめ子：　うん．LAD みたいに:
11　　(.)
12　ゆめ子：　. hh LAD みたいのないのかしら.
13　　(1. 5)

14　ひとみ：　な−　なんですか？
15　ゆめ子：　〈LAD〉っ［てほら課題の。
16　ひとみ：　　［あ：：：. hh 誰も研究してないだけであるんじ
17　　ゃないですか？

01 行目でゆめ子は一般技術の習得例として楽器類の習得について話し始め、「楽器類は：」と言って一旦聞き手の反応の機会を設けて 02 行目でひとみが「楽器類」と言って反応を示すと 03 行目で 01 行目の続きと思われる文を完成する。ひとみはゆめ子が「子供の時から」まで発するとその続きを予測して「うん」をいくつか重ねて同意を示す。06 行目ではゆめ子は楽器類の習得が第二言語習得に近いという意見を表明し、ひとみはゆめ子が文を完成するのを待たずに再び「うん」を重ねて同意を表現する。06 行目から 07 行目でゆめ子は「バイオリンとか：」と楽器類の例と思われるものを挙げる。この場所は 01 行目と同じように表現的にも順番的にも完結していないが、聞き手に反応の機会が与えられている場所、反応機会場である。しかしながらここで聞き手であるひとみの反応がない。すると 9 行目の短い沈黙の後、ゆめ子は自ら「うん .」と発している。前述のように、反応機会場では必ずしも聞き手が反応を示すとは限らないが、その欠如は話し手によって志向されることも多いのである。この場所は、この後の話を続けるにあたって、ゆめ子は自分の出した「バイオリン」というものが先に言った「楽器類」の例として聞き手によって適切なものとして受け取られるか確認をしたい場所であったのだろう。更に、10 行目で「うん. 」と言った後、ゆめ子は「LAD みたいに：」と言ってひとみの反応の機会を再び設ける。ちなみに LAD は Language Acquisition Device（言語獲得装置）の略である。しかしながらひとみの反応はなく短い沈黙がある。すると 12 行目でゆ

め子は少し息を吸ってから「LAD みたいのないのかしら.」と言う。この際の「LAD みたい」という部分は 10 行目の繰り返しである。この繰り返しは 10 行目に対するひとみの反応がなかったことと無関係ではないように思われる。しかしながら、13 行目の 1.5 秒の沈黙に見られるように、ひとみはこれにも反応しない。この 1.5 秒の後、ひとみは「な–なんですか？」とゆめ子の発話に対しての修復を求める。つまり、10 行目にゆめ子がひとみに対して反応の機会を与えたにもかかわらずひとみが反応を示さなかったのもこの「LAD」という言葉の聞き取り又は理解に問題があったからだろう。15 行目でゆめ子がもう一度「LAD」ともう一度今度はゆっくりと言うと、ひとみも今度は理解を示す。この例でみられるように、いくら反応機会場が話し手によって設けられても、聞き手がその前の発話を理解しなかったり、その場所が反応機会場であるということを理解しなかったりすれば、聞き手は反応しない。つまり、反応機会場の提供と反応というものは話し手と聞き手が互いに共同で作り上げていくものであり、そこには聞き手の積極的な参加、少なくとも話し手が提供した反応機会場を聞き分けられる程度の参加、が求められるのである。

例（5）では話し手が提供した反応の機会に聞き手が反応しない例を挙げたが、逆に話し手が反応を得に期待していない場所で聞き手が反応することもある。その際には下記の例（6）でみられるように、聞き手の反応が話し手の発話と重なる。

(6)［データ 2：13：175–180］

01　あけみ：　ああこれね：

02　けい子：　うん.

03　あけみ：　これ 1 番あの L1 variation in cours-（.）course and

04　　strate［gy.〈L1 は:
05　けい子：　　［うんうん.
06　けい子：　うん.
07　あけみ：　variation なし.

上の例ではあけみが課題となっている文献をみて最初に話し合うべき話題を挙げている。01 行目であけみは「ああこれね:」と言う。この発話はこれから自分が「これ」について話し始めるということを示すものであり、その後に聞き手が完全に順番を取って話し始めることを期待したものでなく、単に聞き手に反応をする機会を与えたものであると捉えることができる。けい子もこのことへの理解を示して 02 行目で「うん.」と発する。すると 03 行目から 04 行目では 01 行目で言った「これ」を具体的にして述べるが、このあけみの発話の終わりの方にけい子の「うんうん.」という発話との重なりが観察できる。けい子はあけみのそこまでの発話でその発話が文献にある「L1 variation in course and strategy」というセクションのタイトルを読んでいるものであり、最後の単語は「strategy」であるということを予想して少々早いタイミングで反応しているのである。しかしながら、この場所はあけみがけい子に反応を期待した場所ではないようである。「〈」の表記で見られるように（付録の表記法参照）あけみは「strategy」まで言うとその後すぐに「L1 は:」と続け、けい子の「うんうん.」という発話と重なる。このように、話し手が聞き手に反応機会場として提供したつもりがないところで聞き手が反応を示した場合には、その聞き手の反応は話し手の発話と重なることになる。しかしその後の 06 行ではけい子は適切な場所での反応を見せている。けい子はあけみの発した「L1 は:」は聞き手のなんらかの反応を期待するものであるということ理解して 06 行目で「う

ん.」と適切な反応をしているのである。あけみのこの反応に続いて 07 行目でけい子は「variation なし.」と言って発話を完結している。

ここまでに本稿では、日本語会話において反応機会場というものは頻繁に、しかもある一定の秩序を持って設けられるものであり、反応機会場の提供と反応という相互行為上のやりとりは話し手と聞き手の双方によって志向されて作り上げられていくものである、ということを示した。以下では、この反応機会場というものは日本語第一言語話者同士が第二言語（本研究の場合には英語）で話す場合にも観察できるものであるかどうかについて考察していく。

4. 日本人話者による英語会話における反応機会場（データ 3）

前述のように、これまでに英語第一言語話者同士の会話における反応機会場というものは観察されていない。基本的に各順番は発言順番を構成する単位で構成されているとされている。では、通常日本語で会話している日本語第一言語話者が英語で会話した場合にもこの英語的な会話のスタイルを採るのであろうか。言い換えれば、話す言語を変えれば相互行為の流儀も変わるのか、ということである。

まず、上記の例（6）の 03 行目におけるあけみの英語の発話を観察してみよう。あけみが設けた反応機会場は一塊の英語の発話「L1 variation in cours- course and strategy」の最後にはなく、そのあとに続けた英語＋日本語の格助詞（「L1 は: 」）というところに設けられている。上に述べたように、反応機会場の特徴の一つとして、「区切り」を表わす標識（助詞など）を語尾に伴っている、ということがある。実際日本語第一言語話者同士が英語で話しているデータの中では、英語の発話の中に日本語の助詞をつけて反応機会場と思われる区切りを作り出し

ている例が見られた。下記の例では Satomi と Rumiko が第一言語習得について話している。

(7)［データ 3：10：200–208］

01　Satomi：　and uh: recently the（.）language on the
02　　children .hh uh: is heavily related to the
03　　. hhh their（.）school grade.
04　Rumiko：　mhm.
05　Satomi：　anda: children. Uh :: maybe they are prema tu ↑ re
06　Rumiko：　mh［m.
07 →　Satomi：　　［〉uh: what should I say〈 mature first de,
08　Rumiko：　mhm.
09　Satomi：　anda: getta: larger amount of language
10 →　　acquisition ［fir］st de: =
11　Rumiko：　　［hm］
12　Rumiko：　=mhm.
13　Satomi：　°kekkyoku° can I have the success of the
14　　position in uh: primary school entrance exa: m?
15　Rumiko：　mhm
16　Satomi：　wh: y.

01 行目から Satomi は自分が最近知った研究について報告し始める。ここで 07 行目と 09 行目から 10 行目に注目したい。Satomi は 07 行目で 05 行目に言ったことを言い換えて「mature first de,」と発するが、この際の「de,」は日本語の助詞「で」である。それに対して Rumiko は「mhm」と反応をし、09 行目から Satomi は話の続きを続ける。09

行目では Satomi は 07 行目で言ったことを更に詳しく「getta : larger amount of language acquisition first de : 」と説明を加えるが、この際にも日本語の助詞「で」が最後に加えられ、それに対しても Rumiko は「mhm」と反応を示している。このように、データの中では日本語第一言語話者同士が英語で会話する際に表現的及び順番構成的に未完結な場所で聞き手に反応する機会を提供するために「で」、「ね」などの助詞を語尾に付け加える例が稀に見られた。しかしながら、聞き手の反応を促す方法は助詞を語尾に付け加えることだけではなかったようである。05 行目から 06 行目で見られるように助詞を付け加えなくても聞き手の反応を促進することが可能であり、これは音の強調とイントネーションに深く関係するようである。この点について以下で詳しく検証したい。

(8)［データ 3：8：155–167］

01　Satomi：　a : n for example the child itself（.）has some-
02　　what
03　Rumiko：　u :: n.
04　Satomi：　physica : l?
05　Rumiko：　mhm.
06　Satomi：　uh : disorder related to language acquisiti ↑ on,
07　Rumiko：　°un°
08　Satomi：　or uhm some data say thata :（feller）childre ↑ n,
09　Rumiko：　yeah.
10　Satomi：　or abused childre ↑ n,
11　Rumiko：　°mhm°
12　Satomi：　those kind of thi : ↑ ngs,

13　Rumiko：　°mhm°

14　　(0.4)

15　Satomi：　but generally everybody got success.

16　Rumiko：　°u:[:n°

17　Satomi：　　[°un°

上記の例では Satomi と Rumiko は第一言語習得の成功について話し合っている。01 行目から 15 行目で Satomi は 1 つの文と捉えられるものを何回かに区切って述べている。01 行目で Satomi は第一言語習得が間違いなく成功するという考えに対して例を出して立証し始めるが、沈黙、言葉の区切り、及び「what」に見られるようにすぐに言葉探しに入る。03 行目では Satomi の「what」に対して Rumiko も Satomi が言葉捜しに入ったことを理解しているが自分もその言葉探しに対する答えは分からないことを示し「u:: n」とのみ発する。すると、04 行目では Satomi が言葉捜しの解決策候補と思われる「physica: l?」という言葉を上昇イントネーションで発する。これは一種の質問であり、この言語形式が正しいものであるか、その使用法が正しいものであるか、を聞き手に確認するもので、それに対して Rumiko は「mhm」とのみ発してその言葉捜しの解決策候補の言語表現に対しての問題提起をしないことによってその言葉に対して一種の承認をしていると言えよう。実際その後 06 行目で Rumiko は physical に続く発話をしている。「physica: l?」のように表現的に未完結な場所で単語の正確性を問う活動は日本語会話のみでなく他の言語においても第二言語話者の会話全般で頻繁に見られるものである（Brower, 2004 ; Hosoda, 2006）。「physica: l?」は表現的には未完成であるが、それだけで単語の正誤性を相手に問うという活動をしていることから、順番的には完結していると考えられ

る。しかしながら、その後の Satomi の発話には表現的及び順番構成的に完結していないところでの区切りが多くみられ、それぞれの区切りで Rumiko が反応を示している。興味深いことにそれぞれの区切りの前では同じようなイントネーションと音の強調がみられる。06 行目の「acquisiti↑on,」、08 行目と 10 行目の「childre↑n,」、12 行目の「thi:↑ngs,」にはすべて語尾に類似した音の強調とイントネーションが使われているのである。それぞれの単語の最後の音節が強調されて発音され、そのすぐ後に音調の上昇が見られるが、順番を構成する発話の語尾（質問の際の発話の語尾）ほどは上がっていない。この点は 04 行目の「physica:l?」のイントネーションと比べるとよく分かる。「physica:l?」のように順番を構成する発話の場合にも最後の音節が強調されて発音されているが、音調としてはその後というよりも全体的に上昇が見られ、その上がり具合もより大きい。また、12 行目の「thi:↑ngs,」に見られるように強調された最後の音節が伸ばされることもあるようだ。

上記の例においては反応の機会の提供者は Satomi であったが、このような音調と音の強調は Rumiko が聞き手の反応を促進する場合にもみられた。下記の例（9）では Rumiko がある子供の言語能力について話している。

(9)［データ 3：14：292–301］

01 →	Rumiko：	but uh: the chi:↑ld,
02	Satomi：	un.
03 →	Rumiko：	the so:↑n,
04	Satomi：	un.
05	Rumiko：	uh:: (.) can speak uh: (.) exactly the- uh:
06		native language. uh:［Japanese.

07　Satomi：　［he's native. ＝

08　Rumiko：　＝he'［s nati-］he is native.

09　Satomi：　［uh：：］

上記の例の直前に Rumiko は高校教師である夫から日本人の父親とアメリカ人の母親を持つある生徒の話を聞いたということ伝え、この例では Rumiko はその生徒（子供）の日本語能力が母語話者と同じである、ということを言っている。01 行目から 06 行目で一つの文として認識可能な単位を完成する間に 01 行目と 03 行目で聞き手の反応を促す場を設けている。それらの場所はいずれも単語の後（「chi：↑ld,」及び「so：↑n,」の後）にあり、それらの単語には音節の伸びと音の強調が観察され、その音節のすぐ後に急な音調の上昇がみられる。しかしながらその音調の上昇は順番を構成する発話の語尾ほどの上昇ではない。これらは例（8）の 06 行目の「acquisiti↑on,」、08 行目と 10 行目の「childre↑n,」、12 行目の「thi：↑ngs,」において Satomi が用いたイントネーションと音の強調と同じであると言えよう。つまり、Rumiko と Satomi の両者は同様のイントネーションと音の強調を用いて聞き手が反応をする機会を与えたのである。更に、それぞれは聞き手の立場になった場合には、話し手が提供したそれらの反応の機会を理解して適切なタイミングと形で反応を示したのである。「うん」、「mhm」などの短い発話は話し手の話を聞いていること、自分の反応をその場で求められていることを示すが、同時に自分が話す順番ではないということへの理解を示すものである[3)]。

Satomi と Rumiko が英語会話の中で用いた聞き手に反応の機会を提供する方法は、は上記の日本語会話における発話機会場の特徴に非常に類似している。再掲すると、西阪（in press）の挙げた日本語会話にお

ける反応機会場の特徴は、（ⅰ）単語の語尾にあり（単語の途中にない）、（ⅱ）語尾が伸ばされることがあり、（ⅲ）「区切り」を表わす標識（「さ」「ね」など）を語尾に伴うことがあり、（ⅳ）最後の音が強く発話されることで音調が少し上がることがあり、またその直後に少しだけ下がることがあり、（ⅴ）語尾の伸ばされた音の最後が強く発話されることにより音調が少し上がることがあるが順番を構成する発話の語尾ほどは上がらない、ということであった。これらの特徴の「語尾」が強く発音されるというところを「最後の音節」が強く発音される、とすれば、これらの特徴は今回の日本語第一言語話者同士の英語会話における反応機会場らしき場所の特徴とよく似ている。以下に今回のデータ内で観察された日本語第一言語話者同士の英語会話において表現的にも順番構成的にも未完結であるにもかかわらず話し手が聞き手に反応する機会を与えた場所の特徴をまとめてみる。むろん、下記の特徴は特徴のすべてとは言えないし、また、これらの特徴すべてを満たさないといけないということはない。

- 単語の語尾にある。
- その単語の最後の音節が伸ばされることがある。
- 稀ではあるが、日本語の助詞などを語尾に伴うことがある。
- 最後の音節が強く発話されその直後に音調が急に上がることがある。
- 最後の音節が強く発話されてその直後に音調が上がることがあるが、順番を構成する発話の語尾、つまり質問をする際の語尾の音調ほどは上がらない。

以上のように日本語第一言語話者同士での英語会話においては、日本語会話に見られる反応機会場に類似した場所が多く観察された。つまり、日本語第一言語話者同士が英語で会話した場合には言語が英語であっても日本語的なやりとりの流儀を保つ可能性があるということである。

5. おわりに

本稿では、日本語会話における「反応機会場」の特徴を再確認した上で、日本語第一言語話者同士の英語での会話においてもこの「反応機会場」が観察できるものであるかどうかについて考察した。

日本語会話においては話し手は表現的にも順番的にも完結していないと思われる場所で、聞き手に反応の機会を提供することが多くあり、この反応機会場と呼ばれる場所の有無に話し手と聞き手の両者が志向を示すことを記した。つまり、この場所の構築は話し手と聞き手の双方によって行われるのである。以前より社会言語学系の研究において日本語会話では終助詞の使用などを通して会話参与者同士の共感や連帯が重視されるということが観察されてきた（Cook, 1990 ; Maynard, 1989, 1997）。話し手が聞き手に反応の機会を頻繁に与え、聞き手がその機会に反応を示していく会話の進め方が共感や連帯の重視などの解釈につながっているのであろう。

また、この日本語会話におけるやりとりの流儀、一種の秩序とも言えるものは日本語第一言語話者が他の言語を話した場合に転移する可能性があることを示した。今回のデータにおいて日本語第一言語話者は英語会話においても、音調、音の強調などを用いて聞き手に反応を示す機会を提供した。このことは話す言語を変えても第一言語の会話により身についた会話の流儀というものを変えることは難しいということを示唆する。

今回の研究では日本語第一言語話者同士の英語会話を検証したが、今後は日本語第一言語話者と英語第一言語話者の英語会話も検証する必要がある。日本語第一言語話者は英語第一言語話者と会話する場合にも今

回のデータにみられるように聞き手に反応する機会の提供を頻繁にするのだろうか。それとも今回のデータに見られるような現象は双方が日本語第一言語話者であったから見られた現象なのだろうか。

また、反応機会場がはたして日本語会話特有のものであるのかについても再考が必要である。他の言語、特に日本語と様々な類似点があるとされている韓国語などについてはどうであろうか。今後の研究ではより多くの言語による会話を検証していく必要性がある。

注

1) 「If ～」や「When～」のような文が二人の話し手によって共同発話されることもある。現在の話し手が「If ～」と発しると聞き手がそれに続く要素を予測してその文を完成（anticipatory completion）する場合もあるのだ。下記の例は If 構文が共同で完成されている例である。

［HIC］

Sparky: An if you and Cheryl got together

David: you don't have enough.

(Lerner, 1996, p. 243)

このように、一つの発言順番を構成する単位（TCU）が二人以上の発話者によって共同で完成されることがあるのは英語会話に限ったことでない。日本語においても二人以上の発話者によって一つの順番を構成する単位が完成されることが多々ある（Lerner & Takagi, 1999; Hayashi & Mori, 1998）。

2) 16 行目ではひとみは「うん」を三つ重ねて「うんうんうん .」と発話しているが、これはここでゆめ子の一連の発話が表現的にも順番構成的にも完結点に至ったということへの理解を強く示すものであると考えられる。実際、ひとみは「うんうんうん .」と述べた後にその発言順番内で自分の発話を続けている。

3) しかしながら、この場所はもしその前の話し手の話、又は聞き手の聞き取りや理解になんらかの問題があった場合には聞き手が問題を提起できる場所でもある。

参考文献

Bley-Vroman, R. (1987). The fundamental character of foreign language learning. In W. Rutherford & M. Sharwood Smith (Eds.), Grammar and second language teaching (pp. 19–30). Rowley, MA : Newbury House.

Brower, C. E. (2004). Doing pronunciation : A specific type of repair sequence. In R. Gardner, & J. Wagner (Eds.), *Second language conversations* (pp. 93–113). New York : Continuum.

Cook, H. M. (1990). The sentence-final particle ne as a tool for cooperation in Japanese conversation. In H. Hoji (Ed.), *Japanese/Korean linguistics* (pp. 159–168). Stangord, CA : The Center for the Study of Language and Information.

Hayashi, M. (2003). *Joint utterance construction in Japanese conversation*. Amsterdam : John Benjamins.

Hayashi, M. (2004). Discourse within a sentence : An exploration of postpositions in Japanese as an interactional resource. *Language in Society, 33*, 343–376.

Hosoda, Y. (2006). Repair and relevance of differential language expertise in second language conversations. *Applied Linguistics*, *27*, 25–50.

Hymes, D. (1962). The ethnography of speaking. In T. Gladwin and W. C. Sturtevant (Eds.), *Anthropology and human behavior* (pp. 13–53). Washington DC : Anthropological Society of Wasington.

林誠　(2005)。「文」内におけるインターアクション：日本語助詞の相互行為上の役割をめぐって。串田秀也・定延利之・伝康晴編『活動としての文と発話』ひつじ書房。Pp. 1–26。

Iwasaki, S. (1993). The structure of the intonation unit in Japanese. In S. CHoi (Ed.), *Japanese/Korean Linguistics, Vol. 3* (pp. 39–53). Stanford, CA : The Center for the Study of Language and Information.

Maynard, S. (1989). *Japanese conversation : Self-contextualization through structure and interactional management*. Norwood, NF : Ablex.

Maynard, S. (1997). *Japanese communication*. Honolulu : University of Hawai'i Press.

Lerner, G. (1991). On the syntax of sentences in progress. *Language and Society, 20*, 441–458.

Lerner, G. (1996). On the "semi-permeable" character of grammatical units in conversation : Conditional entry into the　turn space of another speaker. In E. Ochs, E. A. Sche-

gloff, & S. Thompson（Eds.）, *Interaction and grammar*（pp. 238–276）. Cambridge : Cambridge University Press.

Lerner, G.（2004）. On the place of linguistic resources in the organization of talk-in-interaction : Grammar as action in prompting a speaker to elaborate. *Research in Language and Social Interaction, 37*（2）, 131–184.

Lerner, G., & Tagaki, T.（1999）. On the place of linguistic resources in the organization of talk-in-interaction : A co-investigation of English and Japanese grammatical practices. *Journal of Pragmatics*, *31*, 49–75.

森純子（in press）。会話分析を通しての「分裂文」再考察―「私事語り」導入の「～のは節」―.『社会言語科学』10。

西阪仰（2005a）分散する文。『言語』 34（4）: 40–44。

西阪仰（2005b）。複数の発話順番にまたがる文の構築。串田秀也・定延利之・伝康晴編『活動としての文と発話』ひつじ書房。Pp. 63–89。

西阪仰（in press）発話順番内において分散する文：相互行為の焦点としての反応機会場。『社会言語科学』10。

Ochs, E., Schegloff, E. A., & Thompson, S.（1996）. *Interaction and grammar*（pp. 238–276）. Cambridge : Cambridge University Press.

Sacks, H.（1967）. The search for help : No one to turn to. In E. S. Schneidman（Ed.）, *Essays in self destruction*（pp. 203–223）. New York : Science House.

Sacks, H.（1972）. An initial investigation of the usability of conversational data for doing sociology. In D. N. Sudnow（Ed.）, *Structures in social interaction*（pp. 31–74）. New York : Free Press.

Sacks, H. ,Schegloff, E. A., & Jefferson, G.（1974）. A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language, 50*（4）, 696–735.

Schegloff, E. A.（1968）. Sequencing in conversational openings. *American Anthropologist, 70*, 1075–1095.

付録

録音・録画データの表記法

［　］　発話の重なり

＝	切れ目ない接続
〈	次の発話の早急な始まり
(数字)	数字の秒間の沈黙
(.)	わずかな沈黙
:	音の伸び
: :	更に長い音の伸び
.	(語尾の) 下降した音調
,	少々下がって弾みのついた音調
？	(語尾の) 上昇した音調
―	音の強調
↑	音調の急な上昇
↓	音調の急な下降
°　°	小さな声での発話
〈　〉	ゆっくりした発話
〉　〈	速い発話
hh	吐く息
. hh	吸う息
(　)	聞き取り困難な発話